

## 2020年2月9日 説教「良い地に蒔かれた種」

マルコの福音書4章1-20節

マルコの福音書4章からイエスのたとえ話を学びましょう。

### 1. 四つの地に蒔かれた種のたとえ話 (1-9節)

- ① 教え (1-2) 「イエスはまた湖のほとりで教え始められた。おびただしい数の群衆がみもとに集まった。それでイエスは湖の上の舟に乗り、そこに腰をおろされ、群衆はみな岸辺の陸地にいた。イエスはたとえによって多くのことを教えられた。その教えのなかでこう言われた。」。ガリラヤ湖のほとりに多くの人々が集まり、主イエスは舟に乗り、腰かけられて、教え始められたのです。それはたとえ話でありました。キリストがよく用いられた教えの方法でした。
- ② 道ばたと岩地 (3-6) 『よく聞きなさい。種を蒔く人が種蒔きに出かけた。蒔いているとき、種が道ばたに落ちた。すると鳥が来て食べてしまった。また別の種が土の薄い岩地に落ちた。土が深くなかったので、すぐに芽を出した。しかし日が上ると、焼けて、根がないために枯れてしまった。』種蒔きの話です。ミレーの絵を連想します。農夫はばらまくように種を蒔くのです。すると、ある種は道ばたに落ちました。踏み固まった硬い土の上では種が芽を出すことができません。鳥が来て食べてしまいました。二つ目の種は岩地でした。薄い土の上に芽が出て、すぐに焼けて枯れました。
- ③ いばらの地と良い地 (7-9) 「また、別の種がいばらの中に落ちた。ところが、いばらが伸びて、それをふさいでしまったので、実を結ばなかった。また、別の種が良い地に落ちた。すると芽ばえ、育て、実を結び、三十倍、六十倍、百倍になった。』そしてイエスは言われた。『聞く耳のある者は聞きなさい。』三つ目の種はいばらの中に落ちました。成長し始めましたが、いばらが邪魔して大きくなることができず実も結びませんでした。四つ目の種は良く耕された地に蒔かれました。するとぐんぐんと成長し、三十、六十、百倍になったのです。このたとえから学ぶものは誰でしょうか。

### 2. たとえを用いる理由 (10-13節)

- ① たとえの意味を尋ねる (10) 「さて、イエスだけになったとき、いつもつき従っている人たちが、十二弟子とともに、これらのたとえのことを尋ねた。」たとえ話の意味を知りたい者達は十二弟子といっしょになって、それをたずねたのです。
- ② 見えていても (11-12) 「そこで、イエスは言われた。『あなたがたには、神の奥義が知らされているが、ほかの人たちには、すべてがたとえで言われるのです。それは、『彼らは確かに見るには見るがわからず、聞くには聞くが悟らず、悔い改めて赦されることのないためです。』神の奥義(ミステリオン)をイエスの側近たちは知



らされていました。一方、初心の者にはたとえをもって教えられるのです。その理由をイザヤ書 6:9-10 が引用されます。見ても信じないならば、見えないからです。また聞くだけで、悔改めていかなければ、赦しを受けることはできないからです。

③たとえの理解 (13)「そして彼らにこう言われた。『このたとえがわからないのですか。そんなことで、いったいどうしてたとえの理解ができません。』このたとえがわからないのでは、どんなたとえも理解できないでしょう、と主イエスは弟子達にも鋭く迫られます。

### 3. 主の解説 (14~20 節)

①たとえの説明 (14~17)「種蒔く人は、みことばを蒔くのです。みことばが道ばたに蒔かれるとは、こういう人たちのことです—みことばを聞くと、すぐにサタンが来て、彼らに蒔かれたみことばを持ち去ってしまうのです。同じように、岩地に蒔かれるとは、こういう人たちのことです。—みことばを聞くと、すぐに喜んで受けるが、根を張らないで、ただしばらく続くだけです。それで、みことばのために困難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまいます。」このたとえにおける種は御言葉であると主は解き明かされます。御言葉を聞いただけなら、すぐにサタンがそれを持ち去ってしまうというのが道端に蒔かれた種。御言葉を聞いて感動するが、それを深く咀嚼しないのです。試練、苦難がやってくればつまずいて逃げだしてしまうというのが、岩地に蒔かれた種の事だと主は言われます。

②茨の中に蒔かれた種の意味 (18~19)「もう一つの、いばらの中に種が蒔かれるとは、こういう人たちのことです—みことばを聞いてはいるが、世の心づかいや、富の惑わし、その他いろいろな欲望が入り込んで、みことばをふさぐので、実を結びません。」いばらは命の成長を阻みます。御言葉を聞き、受入れて、霊的成長が始まったのに、成長が止まってしまった。なぜか。いろいろな欲望が邪魔したのです。世の人々の様々な考え方に振り回され、将来について思い煩い、お金や財の誘惑にたぶらかされたりしているうちに、福音の種の力が衰えてしまい、霊的命が成長できなくなってしまうのです。結果、霊的果実を生み出すまでに至らないのです。

③ (20)「良い地に蒔かれるとは、みことばを聞いて受け入れ、三十倍、六十倍、百倍の実を結ぶ人たちのことです。」しかし、御言葉を聞いて、それを受入れ、咀嚼していくならば、御言葉の種は芽を出し、成長し、ぐんぐんと成長していくのです。そしてついにその実は30倍にも、60倍にも、いや100倍にもなっていくのです。それはその人が御言葉の水や栄養素をたっぷりといただいていくからです。キリストは、この良い地のように御言葉を受け入れるように、聞く者たちに促しているのです。

### 《結論》

今朝はマルコの福音書 4章からです。マタイ 13章、ルカ 4章に並行記事があります。黙示録との関係で福音書から学んでいます。「耳のある者は御霊が諸教会に言われることを聞きなさい」と黙示録にあります。ここでも主イエスは「聞く耳のある者は聞きなさい」(9節)

と言われいますが、共通の響きがあります。

昨秋、台風被害を受けた南房総の菜の花栽培農家が、種蒔きに機械を使えなくなりました。若い息子が道具を工夫して作り、手で畑に秩序正しく蒔いている姿が映っていました。一方、ミレーの「種蒔き」の絵では、手のひらに種を掴んで、ばら撒いています。今朝のたとえ話での種蒔きは後者のように行っているものと思われます。ですから、落ちる場所があちらこちらと異なっていたのです。

種には爆発的な命の力が内包されています。小さな種に設計図と漲るようなエネルギーが入っているのです。イエス・キリストはこの種をモチーフにして、いくつかのたとえ話をされていますが、その中でも今朝のたとえ話はよく知られているでしょう。ここでは、落ちた地が4つの場所、道端、岩地、茨の地、良い地とあります。イエス・キリストが説明してくださったように、これらの場所は人の魂の有り様を示しています。あなたはどの地にあたると思いますか。御言葉を聞いて、どのような受け取りをしていますか。

ティモシー・ケラー牧師が「聖書を解釈することは大切だが、聖書の御言葉に私達を解釈してもらうことはさらに大事だ」という内容のことを記しています。このキリストのたとえ話を通して、あなたも私も、魂の実状を示していただきたいのです。そして、もし悔い改めを促されたなら、主の前に告白していきましょう。

私たちも豊かな実を結ぶ、良い地とさせていただければなんと幸いなことでしょうか。その実りは、恵みです。私たちにとって実りとは何でしょうか。実際的な実りがありましょう。それは一つです。仕事がうまくいく、課題が達成する、家族が安寧である、健康が守られる等々。しかし、実りとはそれだけではありません。最も本質的には、御霊の実があります。ぶどうの木である、イエス・キリストにつながった時に、御霊の注ぎが与えられ、御霊によって歩んだ結果、与えられる実は、「愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制」(ガラテヤ 5:22-23) ということです。この中でも、今年には特に「喜び」という実をいただいていきたいと、私たちは願っています。そのためにも、私たちの魂の土地を耕していただきましょう。私たちができることは、御言葉の種を受け入れるべく、霊想を心がけるのです。祈りつつその種をいただいていきましょう。「いと小さき生命の種、芽ばえ育ちて、地の果てまでその枝を張る樹と

はなりぬ」(讚美歌 234)